## 微分方程式の基礎

2017年10月28日

## 1 高階方程式の場合

D を  $\mathbb{R}^n$  の閉区間として, $\mathbb{R}$  の閉区間 [a,b] 上で定義された微分可能関数  $x_i:[a,b]\ni t\longmapsto x_i(t)\in \mathbb{R}$   $(i=1,\cdots,n)$  が  $(x_1(t),\cdots,x_n(t))\in D$  ( $\forall t\in [a,b]$ ) を満たしていると仮定する。 $\mathbb{R}^{n+1}$  上の閉区間  $\Omega:=[a,b]\times D$  上で定義された  $\mathbb{R}$  値連続関数  $f_i$   $(i=1,\cdots,n)$  に対して,次の連立方程式を解く.

$$\frac{dx_i}{dt}(t) = f_i(t, x_1(t), \dots, x_n(t)) \qquad (i = 1, \dots, n)$$
  
$$x_i(t_0) = x_i^0 \qquad (i = 1, \dots, n)$$

 $\mathbb{R}^n$  の点を  $\mathbf{y} = {}^T(y_1, \cdots, y_n)$  と表し, $\Omega$  上の  $\mathbb{R}^n$  値関数として  $\mathbf{f}(t, \mathbf{y}) \coloneqq {}^T(f_1(t, \mathbf{y}), \cdots, f_n(t, \mathbf{y}))$  と表すと連立方程式は

$$\frac{d\mathbf{x}}{dt}(t) = \mathbf{f}(t, \mathbf{x}(t))$$

$$\mathbf{x}(t_0) = \mathbf{x}_0 = (x_1^0, \dots, x_n^0)$$
(1)

と簡単に表現できる. この微分方程式についての解の存在と一意性を示す.

命題 1.1. 上で定義した f が, $\Omega$  において (t に関して一様に)y について Lipschitz 連続であるとする. すなわち或る正数 K>0 が存在して

$$|f(t, y_1) - f(t, y_2)| \le K|y_1 - y_2| \quad (\forall t \in [a, b], \ y_1, y_2 \in D)$$

が成り立っている。ただし  $|\mathbf{y}| = (y_1^2 + \dots + y_n^2)^{1/2}$   $(\mathbf{y} = (y_1, \dots, y_n) \in \mathbb{R}^n)$  とする。このとき  $\Omega$  の任意の内点  $(t_0, \mathbf{x}_0)$  に対して或る  $\delta > 0$  が取れて,閉区間  $I_\delta \coloneqq [t_0 - \delta, t_0 + \delta]$  上で (1) の解がただ一つ存在する。

証明.

存在の証明

 $|f(t,y)| = \sqrt{\sum_{i=1}^n f_i(t,y)}$  は  $\Omega$  上で連続であるから有界であり、適当な正数 M>0 により

$$|f(t, y)| \le M \quad (\forall (t, y) \in \Omega)$$

が成り立つ. 正数  $\delta > 0$  を, 閉集合

$$G := \{ (t, y_1, \dots, y_n) \in \mathbb{R}^{n+1} \mid |t - t_0| \le \delta, |y_i - x_i^0| \le M|t - t_0| (i = 1, \dots, n) \}$$

が  $\Omega$  に含まれ且つ  $\delta \leq 1/2nK$  を満たすように取り、G 上で再帰的に解を構成する.構成の手続きは以下である: 全ての  $i=1,\cdots,n$  と  $t\in I_{\delta}$  に対し

$$x_{i}^{0}(t) = x_{i}^{0},$$

$$x_{i}^{k}(t) = x_{i}^{0} + \int_{t_{0}}^{t} f_{i}(\tau, x_{1}^{k-1}(\tau), \dots, x_{n}^{k-1}(\tau)) d\tau \quad (k = 1, 2, \dots),$$

$$x_{i}(t) = \lim_{k \to \infty} x_{i}^{k}(t)$$

とする. まず示すことは、全ての  $k \geq 0$  にわたって  $(t, x_1^k(t), \cdots, x_n^k(t)) \in G$   $(t \in I_\delta)$  が成り立つことである. 数学的帰納法によれば、k = 0 の場合は明らかに  $(t, x_1^0(t), \cdots, x_n^0(t)) = (t, \textbf{x}_0) \in G$  が成り立っているから、 $k = m \geq 0$  の場合  $(t, x_1^m(t), \cdots, x_n^m(t)) \in G$  を仮定して

$$|x_i^{m+1}(t) - x_i^0| = \left| \int_{t_0}^t f_i(\tau, x_1^m(\tau), \cdots, x_n^m(\tau)) d\tau \right| \le \int_{t_0}^t |f_i(\tau, x_1^m(\tau), \cdots, x_n^m(\tau))| |d\tau| \le M|t - t_0|$$

が全ての  $i=1,\cdots,n$  について成り立つ.つまり  $(t,x_1^{m+1}(t),\cdots,x_n^{m+1}(t))\in G$   $(t\in I_\delta)$  が示された.次に示すことは  $\left(x_i^k(t)\right)_{k=0}^\infty$   $(i=1,\cdots,n)$  が各  $t\in I_\delta$  で収束することである.適当に $p,q\in\mathbb{N}$  (p<q) を取れば,

$$x_i^q(t) - x_i^p(t) = \sum_{j=p+1}^q (x_i^j(t) - x_i^{j-1}(t)) \quad , i = 1, \dots, n, \ t \in I_\delta$$
 (2)

と表せるが、 $\delta \leq 1/2nK$  としておいたことにより

$$|x_{i}^{j}(t) - x_{i}^{j-1}(t)| = \left| \int_{t_{0}}^{t} f_{1}(\tau, x_{1}^{j-1}(\tau), \cdots, x_{n}^{j-1}(\tau)) - f_{1}(\tau, x_{1}^{j-2}(\tau), \cdots, x_{n}^{j-2}(\tau)) d\tau \right|$$

$$\leq \int_{t_{0}}^{t} K|x_{j-1}(\tau) - x_{j-2}(\tau)||d\tau|$$

$$= K \sup_{|t-t_{0}| \leq \delta} |x_{j-1}(t) - x_{j-2}(t)||t-t_{0}|$$

$$\leq \frac{1}{2n} \sup_{|t-t_{0}| \leq \delta} |x_{j-1}(t) - x_{j-2}(t)|$$

が各  $t \in I_{\delta}$  で成り立つ.  $|\mathbf{x}_{j-1}(t) - \mathbf{x}_{j-2}(t)| \leq \sum_{i=1}^{n} |x_{i}^{j-1}(t) - x_{i}^{j-2}(t)|$  であるから先の不等式は

$$|x_i^j(t) - x_i^{j-1}(t)| \le \frac{1}{2n} \sup_{|t-t_0| \le \delta} \sum_{i=1}^n |x_i^{j-1}(t) - x_i^{j-2}(t)|, \quad t \in I_\delta$$

まで発展し、これが全ての $i=1,\dots,n$ で成り立つから

$$\sum_{i=1}^{n} |x_i^j(t) - x_i^{j-1}(t)| \le \frac{1}{2} \sup_{|t-t_0| \le \delta} \sum_{i=1}^{n} |x_i^{j-1}(t) - x_i^{j-2}(t)|, \quad t \in I_{\delta}$$

が成り立つ. 帰納的な手順で

$$\sum_{i=1}^{n} |x_i^j(t) - x_i^{j-1}(t)| \le \frac{1}{2^{j-1}} \sup_{|t - t_0| \le \delta} \sum_{i=1}^{n} |x_i^1(t) - x_i^0(t)|, \quad t \in I_{\delta}$$

と表され、右辺が $t \in I_{\delta}$ に依存しないところから

$$\sup_{|t-t_0| \le \delta} \sum_{i=1}^n |x_i^j(t) - x_i^{j-1}(t)| \le \frac{1}{2^{j-1}} \sup_{|t-t_0| \le \delta} \sum_{i=1}^n |x_i^1(t) - x_i^0(t)|$$

が成り立つ.  $x_1^1, \cdots, x_n^1$  が [a,b] 上の連続関数であるから  $\sup_{|t-t_0| \leq \delta} \sum_{i=1}^n |x_i^1(t) - x_i^0(t)|$  は有限確定し、これを c と置けば式 (2) の関係は

$$\sup_{|t-t_0| \le \delta} |x_i^q(t) - x_i^p(t)| \le \sum_{j=p+1}^q |x_i^j(t) - x_i^{j-1}(t)| \le c \sum_{j=p+1}^q \frac{1}{2^{j-1}}, i = 1, \dots, n$$

となり、連続関数の列 $\left(x_i^k(t)\right)_{k=0}^{\infty}$  $(i=1,\cdots,n)$ が $I_{\delta}$ 上で絶対一様収束していることが判る. 従って極限関数 $x_i$  $(i=1,\cdots,n)$ は $I_{\delta}$ 上で連続であり、

$$|f_i(t, \mathbf{x}_k(t)) - f_i(t, \mathbf{x}(t))| \le |f(t, \mathbf{x}_k(t)) - f(t, \mathbf{x}(t))| \le K|\mathbf{x}_k(t) - \mathbf{x}(t)| \le K \sup_{|t-t_0| \le \delta} \sum_{i=1}^n |x_i^k(t) - x_i(t)|$$

が全ての  $i=1,\cdots,n$  と  $t\in I_\delta$  で成り立つから、右辺が  $k\longrightarrow\infty$  で 0 に収束することにより  $(f_i(t,\mathbf{x}_k(t)))_{k=0}^\infty$  が  $I_\delta$  上で  $f_i(t,\mathbf{x}(t))$  に一様収束している  $(i=1,\cdots,n)$ . 以上より

$$\begin{vmatrix} x_{i}(t) - x_{i}^{0} - \int_{t_{0}}^{t} f_{i}(\tau, x_{1}(\tau), \cdots, x_{n}(\tau)) d\tau \end{vmatrix}$$

$$\leq |x_{i}(t) - x_{i}^{k}(t)| + \left| x_{i}^{k}(t) - x_{i}^{0} - \int_{t_{0}}^{t} f_{i}(\tau, x_{1}^{k-1}(\tau), \cdots, x_{n}^{k-1}(\tau)) d\tau \right|$$

$$+ \left| \int_{t_{0}}^{t} f_{i}(\tau, x_{1}^{k-1}(\tau), \cdots, x_{n}^{k-1}(\tau)) d\tau - \int_{t_{0}}^{t} f_{i}(\tau, x_{1}(\tau), \cdots, x_{n}(\tau)) d\tau \right|$$

$$\leq |x_{i}(t) - x_{i}^{k}(t)| + \int_{t_{0}}^{t} |f_{i}(\tau, x_{1}^{k-1}(\tau), \cdots, x_{n}^{k-1}(\tau)) - f_{i}(\tau, x_{1}(\tau), \cdots, x_{n}(\tau))| |d\tau|$$

$$\to 0 \quad (k \to \infty)$$

が全ての  $i=1,\dots,n$  と  $t \in I_{\delta}$  で成り立つ. こうして求められた

$$x_i(t) = x_i^0 + \int_{t_0}^t f_i(\tau, x_1(\tau), \dots, x_n(\tau)) d\tau, \quad i = 1, \dots, n, \ t \in I_\delta$$

は微分方程式 (1) を満たす解である.解が存在する範囲は  $I_{\delta}$  上だけとは限らない.たとえば,次は初期点を  $(t_0 + \delta, \mathbf{x}(t_0 + \delta))$  として範囲を拡張できる.

## 一意性の証明

 $(\phi_i)_{i=1}^n, (\psi_i)_{i=1}^n$  が微分方程式 (1) を満たす解であるとする. つまり

$$\phi_{i}(t) = x_{i}^{0} + \int_{t_{0}}^{t} f_{i}(\tau, \phi_{1}(\tau), \cdots, \phi_{n}(\tau)) d\tau, \quad i = 1, \cdots, n, \ t \in I_{\delta},$$

$$\psi_{i}(t) = x_{i}^{0} + \int_{t_{0}}^{t} f_{i}(\tau, \psi_{1}(\tau), \cdots, \psi_{n}(\tau)) d\tau, \quad i = 1, \cdots, n, \ t \in I_{\delta}$$

が同時に成り立っているとする. 全ての $i=1,\dots,n$ について

$$\begin{aligned} |\phi_{i}(t) - \psi_{i}(t)| &\leq \int_{t_{0}}^{t} |f_{i}(\tau, \phi_{1}(\tau), \cdots, \phi_{n}(\tau)) - f_{i}(\tau, \psi_{1}(\tau), \cdots, \psi_{n}(\tau))| |d\tau| \\ &\leq \int_{t_{0}}^{t} K \sum_{i=1}^{n} |\phi_{i}(\tau) - \psi_{i}(\tau)| |d\tau| \\ &\leq \frac{1}{2n} \sup_{|t - t_{0}| \leq \delta} \sum_{i=1}^{n} |\phi_{i}(t) - \psi_{i}(t)| \end{aligned}$$

が成り立っているから, 先と同様にして

$$\sup_{|t-t_0| \le \delta} \sum_{i=1}^n |\phi_i(t) - \psi_i(t)| \le \frac{1}{2} \sup_{|t-t_0| \le \delta} \sum_{i=1}^n |\phi_i(t) - \psi_i(t)|$$

が成り立ち  $\phi_i(t) = \psi_i(t)$   $(i = 1, \dots, n, t \in I_\delta)$  が示される.これは  $I_\delta$  上だけの一意性ではない.解が存在する範囲では初期値が同じであれば解はただ一つである.

## 参考文献

[1] 笠原晧司, 微分方程式の基礎, 朝倉書店, 1982, ISBN 978-4-254-11415-7.